

# TREND IN ALLERGY

NOMURA, Takashi

野村尚史

京都大学大学院医学研究科皮膚科学特定准教授

アレルギーをめぐるトレンド

## 二重抗原曝露仮説 Dual allergen exposure hypothesis

食物アレルギーの発症は、抗原の経口摂取が原因との考えで、ハイリスク児に対する食事制限療法が推奨されてきた。しかし、近年、バリア機能が低下した皮膚から食餌抗原が侵入し、経皮感作が成立することが食物アレルギーの原因になる、との病因論が有力となりつつある。

### 二重抗原曝露仮説とは

二重抗原曝露仮説 (dual allergen exposure hypothesis) (図) とは、食物抗原感作はバリアが破壊された皮膚からの抗原感作が原因であり、経口摂取はむしろ寛容を誘導するというものである<sup>1)</sup>。食物アレルギーと皮膚炎の関係を説明する説である。

### 二重抗原曝露仮説の提唱に至る過程

従来、食物アレルギーの発症原因は、腸管感作に起因するとされてきた。しかし、いくつかの疫学的観察から、食物アレルギー発症において、経皮感作がより重要であることが示唆された。たとえば、ピーナッツオイル含有製品によるスキンケアは、ピーナッツアレルギーのリスクとなる<sup>2)</sup>が、乳幼児のピーナッツ摂食制限を推奨した米国や英国よりも、摂食制限を推奨しなかったフィリピンやイスラエルのほうがピーナッツアレルギーの発症率が低い。また、ピーナッツアレルギーのリスクは、罹患児のピーナッツ摂取量よりも周囲の家族の摂取量に依存する。さらに皮膚バリアの維持に重要なフィラグリンの異常は、アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis ; AD) の発症因子である。そして、食物アレルギー罹患児の多くは、ADを合併する。こ